師匠のグッド・バイ

偽恋にグッド・バイ

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18587904

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, 律霊, モ腐サイコ小説50users入り

後日談書く予定です。高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊、最終話です。よければお付き合いよろしくお願いします。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

偽恋にグッド・バイ

「――とにかくもう、船が出港した時にはもう２度と会えないと思いましたよ、本当に無事で良かったッス」
いつものクラウンの中。いつもとは違い興奮したマサが霊幻と俺に話しかけてくる。
「ロシアンマフィアの方も霊幻さんから手を穏便に引いてくれるって言うし、ホントに良かったッス。おれらケツモチの悩みの種でしたからね……」
やっぱりあれもマフィアだったのかよ。そんなのばっかりだなホントに。
「今だから言いますけど、霊幻さんのせいでチャイニーズマフィアとロシアンマフィア、抗争寸前でしたからね？間を取り持つ俺たちがどんだけ骨を折ったか……」
「抗争？」
「俺んとことチャイニーズマフィアは仲良しで、俺んとことロシアンマフィアも仲良しですが、チャイニーズマフィアとロシアンマフィアはずーっと仲悪いんすよ。なのに同じ娼婦に入れ込むもんだから、ヒヤヒヤもんで……」
そりゃあ……本当に下手したら、死人が出たな……抗争で。
「それにしても、すごいハクつけてきましたね、霊幻さん。悪霊遣い、だなんて」
「はは……凄い噂だよな」
「またまたぁー。……悪霊って、エクボさんでしょ？」
静まった車内にウィンカーの音が響く。
……マサ。気のいいケツモチのお前にこんなことはしたくなかったが、気付かれたのなら、仕方ねぇな――？
「どんな手品使ったんすか？エクボさんてマジシャンだったんスね！」
呑気な声が響いて俺様はピタリと手を止めた。
「売れっ子でしょ？劇場にしか出てないタイプですか？いやー通りであの頻度で霊幻さん呼べる訳ですよね」

あっ、とマサが神妙な顔をしてぐいっとこちらに寄って来る。
「もちろんエクボさんがマジシャンだってことは内緒にしておきますから……！俺たちも感謝してるんすよ、霊幻さんがお水上がるの手伝ってくれて」
ひそひそと誰も聞いていないのに小声で話すマサ。
「霊幻さんアガリはいいんすけど、ほんっと厄ネタばっかり引っ掛けてくるんですよね。前から辞めたいって言ってたし、こちらとしては水揚げしたかったんすけど、常連がアレだったんで……組としては強く出れない相手ばかりでしたからねー。そんな感じなので、今回精算できたの本当に奇跡だと思ってますし、感謝してますよ」
車が止まる。目的地の公園についた。
「ありがとうございます、エクボさん──ごゆっくり、遊んできてください」
マサが、ことさらうやうやしく霊幻をエスコートして車から下ろす。
「──ありがとう」
最後の仕事。霊幻と長くやってきたマサとの間で、何とも言えない寂しさのようなものが通っていた。
それをぷつりと断ち切って、俺が霊幻の手を取る。
俺と霊幻は銀杏の絨毯が見事な、駅前の公園を歩く。
「……前に来た時は、この木が銀杏かどうかなんて分からなかったな」
「俺たちビールフェスの方に夢中だったからな」
この公園には何度目かのデートで来た。珍しいビールを飲んで、大人向けの屋台を巡って、楽しかった。
「……なあ、霊幻。覚えてるか？最初にお前といったレース場のこと」
「……覚えてるよ」
「お前の万馬券が当たりそうになって、マジでビビったよな」
「あれなー、おしかったよなー」
さく、さく。何処か霊幻の髪の色を想起させる銀杏の絨毯を、２人で進んでいく。
「ラウンドワン？とかに行ったのも覚えてるか？」

「もちろん」
「お前、運動神経悪かったよなー」
「お前が良すぎるんだよ」
「俺様、霊力で身体の潜在能力引き出せるからなぁ」
「チートじゃん」
「バフだろ」
また、落ち葉を踏む音が響く。
「……ストーカーの前でヤったの、燃えたよな」
かっと霊幻の耳が赤くなる。
「……まぁな」
「あれからストーカーは大丈夫なのか？」
「うん。お陰様でな。そういやエクボ、あの時……」
「ん？どの時だ？」
「……やっぱいいや。言いたく無い」
「なんだよ」
「口にしたら、溶けてしまいそうで」
なんだかよく分からないことを、霊幻が言う。
溶けてしまいそう、か。そうかもしれない。さっきから話しているのは、俺が金を積んで霊幻と作った、虚像の思い出ばかりだからな。
俺と『霊幻新隆』が過ごした時間じゃ、ない。
それでも。
「……霊幻、ホテルで食わせたメシさぁ、最初のが１番高かったんだけどさ」
「そうなの？」
「実は俺様、あの店、めちゃくちゃ緊張した」
「そうは見えなかったけど」
「そう見えないように頑張ってたんだよ！……ダセェだろ、高い店に緊張するとか」
「そんなことねぇのに」
そうだな。きっと霊幻は気にしなかった。
「……お前の常連客、ヤバいのばっかだったな」
「そうなんだよなー。まさかマのつく自営業の方だったとは……」

「いや俺はギのつく政治業も相当だと思うぜ」
公園を抜けて。
いつものラブホにつく。
「……入ろっか」
固まる足を鼓舞して俺様は霊幻の後をついていく。
ああ。
ここを出る頃には、もう。
俺様の恋人のふりをしてくれる霊幻は、いなくなる。

※

「なんだよ、くすぐってぇよ」
虹色に光るバスタブを泡風呂にして、ぬるぬる滑る湯で霊幻の身体をしつこく洗う。
細い首筋。白い背中。平らな胸。柔い内腿。すらっとのびた、脚。
俺様のだ。俺様のものだ。俺様のものだった。……金を払っている、間だけは。
きゅ、と霊幻のまだ柔らかい性器を握る。
「あっ」
霊幻が息を詰める。
「んっ……なんだよっ、急に……」
にゅるにゅると湯で滑る手で霊幻の性器を揉んだり親指でしごいたり、弄ぶ。
「あぁっ……ん、っ……で、出るって……」
ああ。
可愛いな。
霊幻の性器は、色が薄くて、形がいい。快感に素直で、抱かれてる時はコイツが１番雄弁だ。
俺のが気持ちいい、って。
俺に抱かれて気持ちいい、って。
何度も何度も精を吐き出してくれる。
……正直、男の性器がこんなに可愛く見えるようになるとは、思って無かった。

いや、違うか。
俺は、霊幻なら、全部……、
「あぁ……っ！」
びゅるびゅると湯の中に精液がバラ撒かれていく。
慌てて霊幻が手で湯船から掬い出していた。
イッたばっかりで良くもまぁそんなに動けるもんだ。たいしたやつだぜ。
「なぁ、もう上がろうぜ。のぼせるって」
しつこい俺からの愛撫に音を上げて、霊幻が風呂場から逃げ出す。
俺はそのピンク色に染まった後ろ姿を目に焼き付けていた。
何もかも、忘れないでいたい。

※

俺がベッドに座ると、霊幻がその足の間に座り込む。
「フェラするよな？」
「……頼むわ」
職業柄、絶倫に成らざるを得なかった霊幻と違って、俺様が借りてるこの男の射精の限界はせいぜい一晩に３回だ。
勿体ないかとも思ったが、今フェラして貰わなかったら、一生して貰えないんだなぁと思ったら、惜しくなった。
「ん……」
霊幻は鼻から息を抜きながら、ぐぽぐぽと浅く口の中に俺様のを含んでいる。
しばらくするとカパっと口を開けて、性器を唾液まみれにした。
その性器を……ごりごりと、霊幻は顔の上に滑らせた。
「……っ」
俺のカウパーが、霊幻の唇を、鼻筋を、まつげを、デコを、汚していく。
とんでもない征服感に尾てい骨が痺れた。
そのまま霊幻は顔コキを続ける。
おしいだくようにチロチロと舌を出して舐めながら、顔中にチンポを擦り付けていく。

愛おしそうに両手で包みながら頬擦りされると、亀頭が眼窩にゴリゴリ擦れてビクンとチンポが跳ねた。
「……髪にかけてもいーよ」
あますことなく。
──穢して、いい。
そう言われた俺は我慢せず、デコずりされた瞬間に、前髪の内側に射精した。
ぶっかけた精液がだらだらと霊幻の顔の上を流れていく。
俺はただ、それを眺めていた。

※

霊幻が仰向けになった俺の上にまたがる。
「……あんまり早くイキたくない」
「分かった」
霊幻が俺の愚息にするするとゴムをかぶせる。
身体を持ち上げた霊幻は、ゆっくりと腰を下ろして、俺の性器を受け入れていった。
霊幻のナカの肉ヒダやザラザラした所をなるべく避けて、快感を感じないように俺は霊幻の中に収まる。
霊幻自身も、極力俺を締め付けないよう、前立腺や膀胱のウラを避けて俺を受け入れていく。
ピッタリと。
性器が嵌り合う間隔。
体温だ。性器が霊幻の体温に包まれている。熱い。俺の心臓みてぇだ。
「んっ……」
感じないようにしていても、どうしても根本が霊幻の入り口を刺激する。それがじわりじわりと効いてきているのだろう、霊幻のナカがひくん、ひくんと蠕動しはじめた。
「……っ、ごめん」
うなだれた霊幻の指がかりり、と俺の腹を軽く引っ掻く。
さっきの蠕動でカリがイイところを引っ掻いたのだろう。霊幻のナ

カがビクビクっと痙攣して、ぎゅううと俺の性器を引き絞る。
「イくっ……」
頬に朱を差して眉を寄せた霊幻が
、唇を悔しそうに噛む。
霊幻は精を吐かないまま、ひくん、と背筋を揺らした。
それを合図に、ナカが前後にビクンビクンと律動する。
ぎゅううと入口も引き絞られて、俺様はぐうっと唸る。その拍子に体積が増したらしい。
「あ、ぁあっ！」
既にイっていた霊幻はその質量に耐えられない、とばかりに後ろに手をついた。
のけぞった霊幻の内部にぐりっと捏ねられて、俺は霊幻に包まれたまま、少しも動かずに射精した。
……射精が長い。淡い刺激でイった俺は、じわじわと精を少しずつ霊幻に送り込んでいく。
少しでも、長く、ナカにいたい。そんなことを暗喩しているようで、俺は自分の性器をわらった。

※

「いやー、動かずにイけるもんなんだな……」
「お前だけだろ」
どんな開発の仕方をしたか知らないが、霊幻の身体は敏感すぎる。
挿れてるだけで絶頂するネコの方が稀有なのだ。イッた蠕動に引き絞られれば、タチ側はイくことはそんなに難しくない。
その敏感さが元々の才能だとすれば、つくづく幸運で不運な男だ。
客は大喜びだろうが、本人としては娼婦の適正が上がるだけだから。
「次はどうする？」
「最後は……」
ピクリと霊幻が顔色を変えずに肩を揺らした。
「いつもみたいに、押し倒したい」
「……分かった」

ベッドに腰掛けた裸の霊幻の肩を、大きな枕に向かって押し倒す。
仰向けになった霊幻の身体を、じっと頭から足先まで眺める。
白くて、艶かしくて、……綺麗だ。
「……挿れるぞ」
膝裏を持ち上げて後口にコンドーム越しの性器を当てる。
「あっ……」
挿入の衝撃に霊幻が枕を掴んで声を上げる。
ぐっぐっぐっ、と腰を小刻みに進めると、結合部がぐちゅぐちゅと音を立てて、霊幻が息をつめた。
「……えくぼ、あい」
「言うな！」
たまらなくなって霊幻の口をキスで塞ぐ。
「んっ、ふぁっ、はぁ、あっ、」
激しく腰を打ち付けると、すぐ絶頂感が這い上がってくる。
「んっ、んぅっ、んっ、んん……っ」
ずっとキスで口を塞ぎ続けると、少し恨めしげに酸欠気味の瞳がじとりと睨み付けてくる。
すまんな、言わないでくれ。言うな。頼むから、言わないでいてくれ。
今、それをお前から聞いたら、きっと俺は、……連れて行ってしまうから。
「ん、んぅ〰〰〰〰っ！！」
ビクビクと霊幻が震える。
俺も締め付けに逆らわず、腰のズゥンとした熱と射精感を味わった。
「……エクボ」
コンドームを外して処理している俺をおずおずと見上げてくる霊幻。
複雑な水面をしたハチミツみたいな色の瞳に、俺様はにっと無理矢理笑ってやった。
その笑みがぐしゃっと崩れて。
俺はベッドに上がって霊幻を抱き締める。
強く、強く、抱き締める。

「いたい、って……」
俺と、どっちが？
「エクボ……」
「応えなくていい」
おずおずと抱き返そうとした霊幻の手がピタリと止まる。
ただ、霊幻を抱き締めて。
蜂蜜糖みたいな髪に顔を埋めた。

※

「……」
「……」
マサの車に揺られて、俺たちはいつもの最寄駅に送って貰う。
「着きましたよ」
車を停めて、マサが霊幻をエスコートする。
「……今までありがとな、マサさん」
「……っ、おつとめ、ご苦労さんでしたぁっ！！！！」
脚を開いてマサがヤクザの最敬礼をする。
ひら、と霊幻はかすかに笑って手を振った。
駅の改札の前で、俺と霊幻はしばしの間見つめ合う。
「……ご利用、ありがとうございました」
ふわりと笑って告げる霊幻に、俺は思ったよりショックを受けてしまう。
「……ああ」
そう言うので精いっぱいだった。
霊幻はもう改札に向かっている。
次第に人混みに紛れて、消えてしまった。
俺はいつまでも、その後ろ姿を追っていた。

※※※※※

ま、そういうわけで。
こうなりゃやる事は決まっていた。

高いスーツを用意して。
バラの花を１０８本、花屋を回って準備して。
霊幻しか相談所にいない時に。
「……じゃまするぜ、霊幻」
面食らう霊幻に跪いて。
「霊幻、『愛してる』」
合言葉を、３回。
「……正気か？お前、俺がどんなことしてきたか知ってるくせに」
「そりゃあ知ってるさ、客だったんだぜ？」
「エクボ、俺はな、俺のことを汚いとも、やってきたことを後ろめたいとも思ってない。ましてや負い目なんてこれっぽっちもない。その上で聞くけど……本当に、ウリしてた俺で、いいのか？お前ならもっとこう、……上物を、手に出来るはずだろ」
「ハッ、上物だと？お前の言う上物ってのは、ウブな世間知らずかプライド高えだけの誰かのお手付きのことか？……そいつは悪霊の伴侶にゃあ、全然足りねぇなあ？」
「伴侶……」
「このバラは１０８本だ。そのパソコンで調べてみろよ、大先生」
カタカタと打鍵音が響く。
「……エクボ！？」
「なあ、『愛してる』よ、霊幻。結婚してくれ。上級悪霊と高級娼婦なんて、お似合いだと思わねぇか？ヒトのセイキを喰うもの同士、ピッタリだとおもうんだが」
「でも、でも……俺、怖いよ、エクボ。俺がさ、俺なんかがさ、幸せになっちゃいけない気がする……」
「幸せとかさ、大袈裟に考えるなよ。ただ、俺みたいな悪霊には、腰つき一つで男どもをふらふら踊らせてた、お前みたいな悪党がふさわしい、ってだけだよ──霊幻。なあ、『愛してる』。結婚してくれ」
ぽろ、と霊幻の目から涙が溢れる。
「はい……っ」
霊幻が花束を受け取る。
ああ。

これで、霊幻は、輪廻の輪から、外れて……悪霊の手に、落ちてしまった。
ごめんな。
でも、偽りの愛を囁いて欲しがらせた、お前が悪い。
「どうせ告白するならよぉ、最後の仕事の時にしろよな……！この数日間、俺だって、悩んでたんだからな！……もう俺のこと、好きじゃ無くなったのかな、とか……」
「その数日間が無けりゃ、お前オッケーしたか怪しいだろうが」
うぐぅっと霊幻が唸る。こいつには飢餓感が必要だ、と思ってたのが、当たった。
さてと。
俺は虫除けの指輪を霊幻の左手薬指に嵌める。……サイズがぶかぶかだったので帰りに直すことにした。
夕方になってシゲオがきて、バラの花束と霊幻の指輪を呆然と見ていた。
「どうして……」
「……割れ鍋に綴じ蓋ってやつだよ。お前がどうとか、お前のせいじゃない。ただ俺が、エクボの事が好きなんだ」
優しく言う霊幻が逆にシゲオにトドメを刺している。
「……納得できません」
燃えるような瞳に困ったように笑う霊幻。
「そっか」
ただ、そう返した。

※

次の日、出勤した芹沢が同じく指輪を見て固まる。
「エクボくんですか？」
「そうだよ」
「どうして」
「好きだから」
「どうして……俺のことを好きになってくれなかったんですか……」

ぼろぼろと芹沢が泣き出してぎょっとする。
「悪霊が……エクボがあなたに相応しいとは思えない。エクボはあなたの弱みに上手くつけ込んで、あなたの心のスキマに入っただけだ」
おっと。鋭いな、さすが芹沢。
「そんなこと……あるのか？」
ゆらぐなゆらぐな。
「俺たちは認めませんよ。必ず取り返します」
そう言って芹沢は仕事を始めた。
霊幻はただ、困ったように笑った。

※※※※※

それから十年が経った。
「な、自然消滅したろ？」
今は霊とか相談所は、俺と霊幻をメインに、トメの後輩がたまに手伝いに来る程度で、細々と穏やかに続いている。
「ホントだったなぁ」
シゲオは進学するにつれだんだん忙しくなり、相談所に顔を出さなくなった。今は大学の友達と『筋トレオンライントレーナー』のベンチャーを立ち上げ、忙しく働いているらしい。
律は敏腕弁護士としてバリバリ活躍しているらしい。美形で金持ちで仕事ができて、モテて困る、と羨ましいことをこの間会った時に愚痴っていた。
芹沢は相談所に籍を置きながらも、基本的には政府のテロ対策部隊の特別顧問として出ずっぱりだった。稀有な超能力の持ち主であるだけでなく、元テロ組織の幹部という経験が重宝されているらしい。
「……みんな立派になってくれて良かった」
ぬるいお茶を啜る霊幻が幸せそうに笑う。
「……そうだな」
俺は微笑みながら霊幻の髪を指で整える。
相談所の窓から穏やかな午後の光が、蜂蜜糖の髪をゆらゆらと陽炎

めかせる。
霊幻が俺様の手を取って頬に当てる。
「……好きだなぁ」
「なんだよ突然」
「いいだろ、別に」
「……そうだな」
俺は背を丸めて後ろから霊幻にゆったりと口付ける。

唇を名残惜しそうに離した元悪霊と元娼婦は、幸せそうに笑い合った。

コンコン、と相談所のドアがノックされる。
「はい、どうぞ」
明るい霊幻の声が響く。
が。

真っ青な顔をしたマサが、１０年ぶりの顔を見せた。
「……っ霊幻さん、エクボさん、すみません……っ！」
マサに続いて、高いスーツを着たシゲオ、律、芹沢が入ってくる。
「ひ……久しぶりだな、お前ら？ど、どうしたんだ、突然……」
霊幻の声が震える。俺様は嫌な予感に顔を歪めた。
３人はニッコリと笑って。
「裏メニュー」
シゲオが札束を取り出す。
「裏メニュー」
律が札束を取り出す。
「裏メニュー」
芹沢が札束を取り出した。
「あ……ぁあ、ああああああっ」
霊幻が真っ青な顔をしてゆっくりと首を振る。

「すんません、霊幻さん」
マサが懐から銃を取り出す。
「この３人からの依頼は、『最優先で』『絶対に断らないで』ください」
呆然とする霊幻の目から涙が一筋落ちる。
「師匠」
シゲオが口元だけで微笑う。

「Ｃコースで」

なお、太宰治のグッド・バイは———未完である。